

嗚呼茫々の

(昭和十一年寮歌)

穴戸昌夫 作歌
村岡五郎君 作曲

榆陵謳春賦

われら 吾等が三年を契る絢爛のその饗宴はげに過ぎ易し。然れども見ずや穹北に
またとこしへ 瞬く星斗永久に曇りなく、雲とまがふ万朶の桜花久遠に萎えざるを。
寮友よ徒らに明日の運命を歎かんよりは、榆林に篝火を焚きて、去りては
再び帰らざる若き日の感激を謳歌はん。

三

嗚呼茫々の大曠野
先人ここに芟りて
建てし自由と自治の城
その源は遠くして
濁世叱咤す六十年の
苔むす青史誇りなん

さばれ今宵の我が寮
「人生意気」に集い来し
結びとけぬ友垣が
光明と權威謳ふとき
星屑原始林に輝きて
流転の相を示すなり

二

老桜の蔭や北辰の下
少時旅寝の若き子が
自治燈かかげ聖鐘うちて
情眠れる魂を覚醒すべく
降魔の剣かざすとき
狂へる颯も声ひそむ

四

ああ感激の美酒は
廻りて早きその三年
希望の光恵めては
榆林にかはす盃に
啓示の翳を泛べつつ
男の子の眸に涙あり